

第1回植林緑化派遣団を派遣

沙漠に実現した日中友好の緑の架け橋



現地では盛大な開工式が行われ、植林緑化事業の記念碑が建てられました。(寧夏回族自治区・紅寺堡にて)

残念ながら、SARSの影響で昨年度の3次に渡る派遣団は中止せざるを得なくなりましたが、今年度はそのような障害もなく順調に第1回植林緑化派遣団の派遣を行うことができました。

既に植林緑化事業自体は現地の人たちの手で昨年度から進められており、緑がしっかり根付いている様子は昨年9月に派遣した現地調査団により確認されていますが、日本からのボランティア派遣団が現地での活動に直接携わるのは初めてのことであり、「今年こそは昨年の分まで成功させよう」との思いで、36人もの規模の大人数の派遣団を組み、第1回植林緑化派遣団を4月16日から22日にかけてプロジェクト実施地である寧夏回族自治区・紅寺堡地域に派遣してきました。

今回現地に足を踏み入れた派遣団一行は盛大な歓迎を受け、開工式の後に植樹を実施しその後これまでの植林の成果を視察してきましたが、2年前の調査時には地平線まで一面の砂の大地で「本当にこんなところに植物が育つのだろうか」と危惧されていたのとは裏腹に、すでに植えられたアカシアやポプラの木々が、しっかりと大地に根を下ろしている様子を直接目にし、沙漠の緑化が少しずつではあるが確実に進んでいることを実感しました。

今号では、第1回植林緑化派遣団の現地での活動報告をいたします。

引き続き、緑の架け橋推進センターの活動にあたたかいご支援・ご理解をいただくとともに、これからの活動にも積極的な参加をお願いします。

緑の森を夢みて

～会長あいさつ～

緑の架け橋推進センター会長 佐藤 晴男



記念植樹の感動を！！

紅寺堡記念碑の前で、地域（行政・議会）の代表や児童と植えたあのポプラの木はしっかりと根付いているだろうか、しっかりと灌水をしてくれているだろうか、沙嵐に耐えているだろうか、そしてバケツで水やりをした藁草（梭梭草）に新芽が吹いているだろうか、過酷な自然条件の中で樹木が育っているのか、今すぐにもこの眼で確かめてみたい思いに駆り立てられている。

紅寺堡地域の見渡す限りの沙漠に少しづつ緑が根付き色づこうとしていることは間違いない。

小さなボランティア組織が地域の人達と中青連の仲間との共同作業としてはじめた植林緑化事業が着実に進んでいる。雄大な山々に囲まれた整備された耕作地になることは確実だ。開工式に参加した児童、地域の人達の澄んだ瞳が一段と輝く笑顔になることを期待している。

もちろんこの事業は、植林生態緑化にとどまらず国境や歴史認識を共有、超越して未来に向かって平和と友好を築き上げる一歩にしなければならない。開工式や記念植林で得た感動を日本国内で広げ継続する思いを強くしている。

着実に根付きつつある植林事業

緑の架け橋（緑化協力事業）は寧夏回族自治区における「母なる大河（黄河）を守るプロジェクト」の一環である、紅寺堡地域の生態緑化事業を、黄砂の飛散、沙漠化の進行防止、さらに耕作地の整備による食料の確保と生活の安定をめざし、中青連と地域の人達との共同の植林事業として、2003年から2005年までの3ヵ年計画で実施することにした。

- (1) 一年目（2003年）は事業規模で100ha（灌水整備済み）の沙漠地に植林を行った（助成対象90ha）。残念ながら、2003年はSARSの影響で3回予定されていた植林派遣団は中止せざるを得なかったが、現地では中青連と地域の人達がアカシア・ポプラ等の樹種、131,400本（助成117,000本）を計画通り植林して9月の現地調査団が行った時には緑の葉を生い茂らせて、根付いていることが確認できている。
- (2) 二年目（2004年）は事業規模で140ha（灌水整備済み）の沙漠地に現地ではすでに3月～4月の2ヶ月間で238,800本位の植林を終えて記念の植林地だけが残されていた。緑の架け橋推進センターは一年遅れになったが、植林派遣団を現地に送り、開工式と記念植林を実施した。

開工式には、地元の住民に、小・中学校の児童、行政の関係者、中青連（本部・地域）の代表者等約1,000名の参加する中で行われ、それぞれの代表の挨拶や決意、そして、植林地域の中心地に記念碑の建立、除幕式と参加者一同でポプラの記念植樹をした。

- (3) さて、三年目（2005年）の計画だが、紅寺堡地域には広大な沙漠地が存在する中で、灌漑設備の整備と防沙整地作業の進行具合が未確定だが、第一期の3年計画の中で残りの面積は約370ha程度が見込まれ、緑化基金からの補助金と現地受け入れ体制を見定めて具体化することになっている。又、併せて、すでに植林が終了している地域においては灌水設備の管理や病虫害の防除、さらに野ねずみ、野うさぎなどの駆除等新たな対策が迫られている。さらに2期目（2006年以降）の計画について、すでに中青連と寧夏回族自治区から相談を持ちかけられているが、植林地域の選定、地元住民の熱意と体制等について今秋から来春にかけては現地調査を行いつつ進めていきたいと思っている。

御礼にかえて

第1回植林派遣団（36名）がとにかく全員元気で帰ってきたことに安堵している。

食料事情、衛生事情が必ずしも万全といえない沙漠の中での共同作業故に、事故や怪我等のアクシデントが心配だったが案ずるに及ばず、参加者の協力・協調で開工式、記念植樹を終えることができた。

参加者を送り出した、団体関係者に紙上をかりて御礼を申し上げる。

第1回植林緑化派遣団報告

はじめに

寧夏回族自治区は中国北西部に位置し、降水量より蒸発量のほうが約8倍も多い気候が特徴の沙漠地帯です。年々深刻になっている沙漠化や黄砂の被害に対して、中国では「母なる川を守るプロジェクト」という緑化事業が40程立ち上がっており、そのプロジェクトに日本政府も援助をしています。この寧夏回族自治区の緑化事業を進めるにあたって、中心となっていた中華全国青年連合会と自治労・全林野・全農林・全水道やボランティアなどからなる「緑の架け橋推進センター」が協力しあい今日に至ったということです。緑化事業は3年計画で昨年度から始まっており、当然、推進センターも初年度となる昨年からの参加をする予定でしたが、SARSの影響もあって残念ながら2年目となる今年からの参加（総勢36人）となりました。

行動記録

○4月15日

16:00 ルポール麹町会館にて

第1回植林緑化派遣団の最初の顔合わせとなり、学習会と現地での行動の打ち合わせを行いました。その中で佐藤団長からは「SARSの影響で昨年は断念しました。今回の植林をする場所は、パウダー状の砂地で年々大地が変わる状態です。初めての試みなので色々不手際なことがあるかと思いますが、みんなでがんばりましょう」と挨拶があり、全員で配布された資料に目を通しながら説明を受け、私たちのプロジェクトの母体である、中国の「母なる大河を守るプロジェクト」の概略説明のビデオを見てその重要性を学びました。

17:30 壮行会開始

各団体からを代表してのあいさつなどを受け壮行会が行われ、班別に分かれた各テーブルで親睦を深めました。

19:00 バスでホテルへ移動

○4月16日

7:10 ホテル出発

9:00 搭乗

11:55 北京着

14:10 バス出発

15:10 天安門広場着

15:50 広場出発

17:00 21世紀飯店(中日青年友好センター)着

17:45 中華全国青年連合会との交流会開始

佐藤団長から中国側に向け、「中青連は胡錦濤主席を選出している素晴らしい組織であります。みなさんと共に事業を推進できることを光栄に思います。今回の作業は時間的には極めて短いかもしれませんが、これがきっかけとなって両国の平和と友好がますます深まることを願っています」と挨拶があり、それに対し中国側からも答礼がありました。



中青連の張代表（写真右）から証明書交付を受ける派遣団の石川事務局長（写真左）

また、私たちのプロジェクトが「母なる大河を守るプロジェクト」の一つであり、行動を表す
るとして、中青連の張代表から一人ひとりに今回の植林事業の証明書が手渡されました。

- 19:55 交流会終了・21世紀飯店（中日青年友好センター）発
- 20:40 北京空降着（飛行機が遅れたお詫びに水とビスケットをもらう）
- 22:10 出発 銀川へ
- 23:47 銀川着 「熱烈歓迎」の横断幕の前で記念撮影
飛行機の2時間遅れ到着にも関わらず、銀川空港では現地の青年連合をはじめ多くの人々が「熱烈歓迎」と書かれた横断幕を掲げて待っていてくれました。
- 24:38 ホテル着

○4月17日

- 8:00 ホテル出発
- 10:00 紅寺堡到着
- 10:20 開工式開始

文字通り「熱烈歓迎」を受けてはじまった開工式で、まず、事務局長から事務局の紹介を行いました。中国側からは青年連合の湯（タン）氏が挨拶に立ち、「みなさんのやることが母なる大河を守るプロジェクトの一つの模範となることを願っています。この事業には様々な支援を受けています。そのなかでも紅寺堡のプロジェクトは中国北西で第一のものとなっています。木を育て人を育てるのは大切です。環境を守りこのようなことを推進していくのは日本のような先進国の責任でもあります」

日本側からは佐藤団長が挨拶に立ち「SARSの影響で昨年するはずだった開工式ができなく、また、顧問の村山元総理ができなくなり申し訳ありません。私たちは自治労・全林野・全農林・全水道など様々な団体の協力でこのボランティア組織を結成することができました。今の環境問題は日常生活にまで影響を及ぼしています。2002年に現地を視察。寧夏、紅寺堡での全青連などの熱心な姿に心を打たれてボランティア活動をする決心をいたしました。この紅寺堡のプロジェクトは黄砂防止、沙漠化防止だけでなく食糧確保に至るまでの壮大な計画です。緑の架け橋という小さな組織ですが、国境を越えて日中友好を一層深くすることを願っています。また、肌で覚えた感動を日本に伝え生態改善に努めます。短い時間ですが、みなさんとの共同作業が大きな成果となりますことを祈念致しましてあいさつにかえさせていただきます」

11:00 開工式終了～植林開始

盛大な開工式を終えて、いよいよ植林に入りました。土曜日でしたが、地元の中学生も大勢駆けつけてくれた共同作業となりました。植える木ですが、3年もののポプラの苗木を植えます。これは、砂地を食い止めるには一番適しているからだと言（タン）氏から説明を受けました。まず、直径60cm程で深さ80cmまで穴を掘ります。次に苗木を入れて、根が被さるくらいに砂を入れて水をかけます。これは、水を吸いやすくするためにする作業です。しばらく放置しておいてから穴を全部砂で埋めて、鉢を作ってまた水をかけるまでが一本にかかる作業です。



土曜日で学校が休みにも関わらず、開工式にはおおぜいの地元小・中学生も参加した（紅寺堡・式典会場にて）



地元小・中学生とともに一つひとつ手作業で植樹をしていく

補足ですが、この紅寺堡プロジェクトの目的には、水がないためこの地に農民が住めず、貧しい生活をしている人々がいる。そこで植林開発をして点在している農民にこの紅寺堡に集まってくるもらい、5年間かけて自分たちで鎮（町）を作っていくということでもあるそうです。すでにプロジェクトが始まってから16軒あまりが引っ越ししてきているとの報告を受けています。また、紅寺堡の人たちの年収ですが、一昨年は500元だったものが昨年は1200元にまでになったそうです。

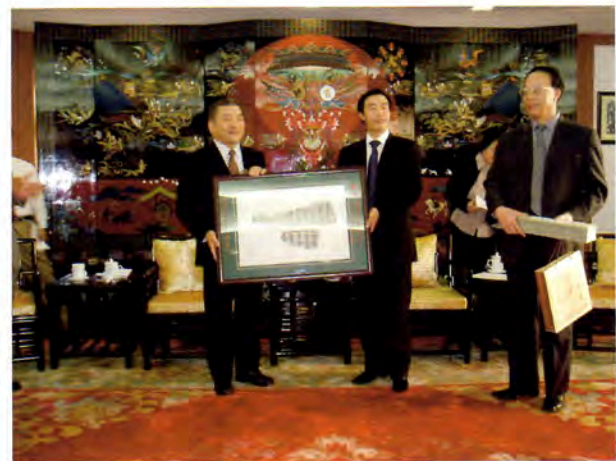
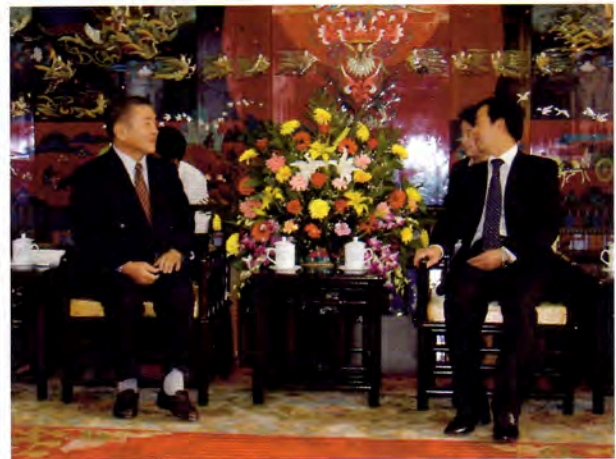
- 12:25 昼食 「みなさんは緑の使者」との歓迎を受ける
- 13:50 出発 昨年植林した場所を視察
- 14:15 見学地を出発
- 16:15 ホテル着
- 17:40 ホテル出発 表敬訪問へ
- 18:00 自治区人民政府を表敬訪問

紅寺堡で植林を終えた私たちは、この植林活動を現地で積極的に進める寧夏回族自治区政府の政庁を表敬訪問しました。自治区政府側からは干（ウー）寧夏回族自治区共産党常任委員会秘書長をはじめ趙（チョウ）自治区人民政府副主席などが出席し、地元の報道関係者も詰め掛け、ここでもこの植林活動に対する地元の関心の深さがうかがわれました。

干（ウー）常任委員会秘書長から「団長を始め、みなさんの訪中を心から歓迎いたします。私たちは、貧しいところであれ、いいところであれ、開発をしていかなければなりません。今は紅寺堡に緑はないけれど、来年になったら景色も変わるでしょう。今日、行ってこられたところで、なにか感想はありますか？」と質問がありました。

それに対し佐藤団長からは「熱烈な歓迎をうけ、感謝と共に責任を感じています。まず、冒頭にSARSの影響で昨年来ることができなかったこと、そして、村山元総理が今回ここに同行できなかったことに対してお詫び申し上げます。2002年来て以来、今回来てまず見た感想は、第1期は木が植わっているし、銀川の町も発展している。単に生産数を上げるだけでなく、環境保全と生態系改善に目を向けているところは、むしろ日本が学ばなければならないと感じています。しかし、大きな沙漠がある。この事業で日中の未来の平和に寄与できればと思っています。今後とも友好・信頼を深めていきたい。」と返事しました。

干（ウー）常任委員会秘書長はさらに、「感心しています。私たちもこの事業を重視しています。各界の支援を受けているので長いですが、がんばってやりました。自治区1988年以来、色々な協力がありまして、島根との友好林なども建設してきました。我が自治区は色々支援をもらいまして、中青連の援助ももらって人民教育と植林事業を設置。ここはうまくいっているので中央政府も見ている。ここは教育と植林事業を発進するところとしている。紅寺堡のプロジェクトも、よいモデル林になると確信しています。ですから私たちは両国の青年たちの友好交流を進め、この



寧夏回族自治区人民政府を表敬訪問する派遣団・佐藤団長と干（ウー）寧夏回族自治区共産党常任委員会秘書長

ようなプロジェクトを前へ前へとと思っています。これからも植林の範囲を広めていくことを希望しています。この事業は幸せをもたらすだけでなく友好と平和をもたらすと思っています」と続け、このようなやりとりの後、記念品の贈呈などが行われ表敬訪問を終了しました。

18:35 終了

18:50 夕食交流会開始「熱烈歓迎日本「緑色之橋」代表团訪問寧夏」

この交流会の場で私たちは、自治政府の代表者や現地の青年連合の方々から想像をはるかに上回る歓迎を受け、感激した佐藤団長は以下のように挨拶をしました。

「ここに来る前に北京で飛行機が2時間遅れましたが、盛大な歓迎を受けました。さすが中青連。今日は学校が休みなのに開工式と植林をしていただいたことにも感謝しています。また、今日、次の植林事業の計画地に案内されたのですが、ここも砂埃のすごいところでした。そこで、私の乗った車をパトカーが先導して頂いて、気持ちを受けとめています」

歌や琴の演奏、鎌田事務局長の「朋友」などがあり、最後は全員で北国の春を大合唱しました。日本から持ってきた土産を手渡して終了しました。

20:20 終了 ホテル出発

20:40 ホテル着

○4月18日

8:10 出発

10:00 現地付近到着 バスを降りて徒歩

10:50 現場到着～梭梭草に水やり開始

この日は梭梭草（そうそうそう）に水をやるという作業を行いました。この草は下の部分（恐らく根の部分だと思います）が漢方薬になるというもので、3年かけたらひとまず一人前で10年かけて最長3年にまで育つというものでした。水をやる前に、梭梭草の周りに適当な大きさの鉢を作ります。そして水やりですが、植林する区画にあわせて用水路がありますので、そこからバケツで水を汲んで運んでやるという手作業を行っていきました。

11:30 終了

11:50 昼食

13:20 出発

16:10 沙湖到着

18:30 出発

19:30 夕食

20:55 出発

21:05 ホテル着

○4月19日

6:30 出発



寧夏回族自治区の人々と夕食交流が開かれ、友好を深めてきました



梭梭草（そうそうそう）

乾燥に強く、漢方薬の原料にもなります



梭梭草（そうそうそう）に水をやるために再度穴を掘り、水をやる準備をする

- 7 : 0 0 銀川空港着
- 8 : 0 0 出発
- 8 : 5 0 西安空港着
- 9 : 2 0 バスで出発
- 1 0 : 2 0 「兵馬傭」(始皇帝の陵墓) 着
- 1 2 : 3 0 出発
- 1 4 : 0 0 「華清池」着

○4月20日

- 9 : 0 0 出発
西安市内視察の後、昼食
空港へ移動
- 1 4 : 5 0 西安空港着
- 1 8 : 2 0 北京着
- 1 9 : 0 0 レストラン着 解団式

大部分の団員は日程の都合で翌日帰国となることから、第1回植林緑化派遣団はここで解団となりました。中間総括に立った石川事務局長は「振り返りますと、天候に恵まれ、事件や事故に遭わずに来ることができた。劉さんをはじめ多くの人に支えられた。この事業の目的は①植林、技術などを共有。②地域住民・中青連との交流。③5000年に渡る歴史・文化に学ぶ。これについては一部ではありますが触れることができました。①②についてはほぼ達成できたと思います。3年計画でまだ残っていますので、職場で伝えて事業の展開に役立つようお願いします。これからもよろしくお願いします」と述べました。



「兵馬傭」(世界遺産登録)
始皇帝の陵墓、膨大な広さと莫大な数の埴輪に囲まれる

○4月21日

- 7 : 0 0 出発
- 7 : 3 0 北京空港着

この日も飛行機の時間の都合で早朝に起床し、帰国準備をしました。そして北京空港で飛行機に乗り日本に帰国するだけとなりましたが、ここで私たちの旅のはじめからずっと同行し、いろいろお世話になったガイドの劉(リュウ)氏からこの旅最後の挨拶がありました。この挨拶を聞くとこの旅は普通の旅行では絶対に行かないところを訪れ、めったにない経験をしてきたこと、そして私たちが少しでも国際交流の役に立ったことが感じられ、非常に感慨深い思いでした。

「今回の作業で中国と日本の友好関係も築き上げられたと思います。僕も小さい力ですけど、みなさんと作業をして、ちょっと何かできたかなと、これからも続けていきたいと思います。政府間ではいろいろありますが、国境を越えて、地球市民、地球の住民として仲良く、環境平和のためにがんばっていきましょう。また、北京で待っています。北京から先は僕がみなさんを連れて行きますから。再見!!」

- 9 : 1 0 搭乗
- 1 4 : 0 5 成田着

※ 延泊組は22日、盧溝橋、抗日戦争資料館などを視察し、同日成田に到着しました。

第1回植林緑化派遣団のまとめ

事務局長 石川 昇

3年計画で始まった「寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクト」の2年目に当たる4月16～22日（21日までの班を含む）、佐藤晴男緑の架け橋推進センター会長を団長に寧夏回族自治区などを訪問しました。

今回の派遣は、初年度に実施する予定が中国内のサージの発生によって延び延びになっていたもので、満を持して自治労、全農林、全水道、全林野、「緑の架け橋推進センター」等から36名が参加しました。

今回の派遣団の目標は、3点に集約されます。その1は、紅寺堡地区での植林、撒水を実際に行い生態緑化プロジェクトの一翼を担うことでした。あわせてそのことを通じその意義、目的、背景、植栽条件、植林技術などを理解することにあります。事前の学習会でアウトラインは、把握していきしましたが、開工式、共産党・自治政府への表敬訪問、交歓会などでの挨拶や実際の植林、撒水などによって一定程度理解を深めることができました。その2は、地域住民とりわけカウンターパートナーである中華全国青年連合会との交流でした。この点は、子供たちや地域住民との共同作業となった記念植樹、撒水をはじめ、交歓会、昼食・夕食懇談会等を通じ深めることができました。特に開工式は、地元の小・中学生や地域住民1000人にもものぼる心のこもった出迎えに、多大な感動を呼ぶものでした。その3は、悠久5000年を誇る中国の歴史、文化に触れることでした。きつい日程の中で西安、北京を訪れ、その一端を垣間見ることができました。

期間中、平均気温をはるかに上回る好天に恵まれ、事件、事故に巻き込まれず、健康を害した者もでず、きつい工程でしたが順調に推移したことは、各班長を始めとする団員や地元関係者の協力によるもので、友情と連帯を育むものとなりました。

植林は、開工式後の記念植樹で、新疆ポプラの大苗約300本を記念碑前に子供たちとともに丁寧に植栽しました。また、撒水箇所は、3キロ程度徒歩で移動し、日本では養命酒の生薬になっているスオスオ（櫻櫻）およそ400本に黄河から引いた灌漑溝の水をバケツで汲み取り一草一草に撒水しました。

また、開工式そのものは、熱烈歓迎の入場式に続き、双方のメンバー紹介、双方の代表・市副主席などの挨拶を受けた後、記念碑の除幕が行われました。

こうした一連の行動は、全体としてスムーズに運びましたが、具体的な行動がその場その場の感があり、今後課題を残しました。また、植林そのものも記念植樹の位置付けではなく、対象を広げた対応が必要でした。

しかし、そうしたいくつかの難点や課題はあるものの、目標の3点はおおむねクリアしており、初めての派遣団として所期の目標を達したものと評価できます。

今秋には補植の時期を迎え、今次計画で植栽した140ヘクタールの活着度が問われますし、来年は最終年度として春の植林、秋の補植へと続きます。この間には、継続的な保育管理（主に撒水）が必要です。植えた後のアフターケアは、成林する間まで続き、これからが本番となります。

多くの関係者の努力や協力によって、今次派遣団が実現いたしました。感謝を申しあげつつ、この成果を職場や地域に広め、引き続き派遣へのご支援をお願いし、報告と致します。

2004年 緑の架け橋推進センター 第1回植林緑化派遣団名簿

団役職	氏名	性別	所属/役職
団長	佐藤 晴男	男	緑の架け橋推進センター/会長
副団長	道見 忠弘	男	自治労新潟県本部/執行委員長
副団長	立石 元	男	自治労国費評議会/副議長 自治労府職大阪社会保険職員労働組合
事務局長	石川 昇	男	全国有林退職者協議会/事務局長
事務局次長	佐藤 厚夫	男	自治労国費評議会/議長 自治労都庁職社会保険支部
団員	和田 道憲	男	全林野/(有)東和木材産業
団員	岡本 健	男	全林野/岡山森林管理署勝山森林事務所 森林官
団員	野崎 由男	男	森林フォーラム会員
団員	河野 裕	男	自治労香川県職労/香川県西部林業事務所
団員	川上 満	男	自治労沖縄県本部/書記長
団員	坂本 勲	男	自治労青森県本部/財政局長
団員	道見 綾子	女	自治労新潟県本部
団員	上原 義人	男	自治労沖縄県職労/沖縄県庁
団員	橋谷 伸一	男	自治労宮崎県庁職員労働組合/執行委員
団員	梶原 亨	男	自治労宮崎県庁職員労働組合/執行委員
団員	原田 秋生	男	自治労大分県本部/竹田市役所
団員	萱島 正一	男	自治労大分県本部/副執行委員長
団員	永田 賢二	男	自治労長野県本部/中央執行委員
団員	阿久津 善弘	男	全農林/関東農政局土浦統計情報センター統括統計官
団員	鈴木 重憲	男	全農林/東北農政局 専門技術指導官
団員	玉井 幸治	男	全農林/森林総合研究所
団員	阿部 哲巳	男	全水道東北地方本部/書記長
記録担当	村田 幸弘	男	全水道青年女性部/副部長
団員	田村 昌司	男	国費評議会 分会書記長/青森社会保険事務所
団員	加藤 哲也	男	自治労国費評議会/地連幹事 三重県職員労働組合社会保険支部
団員	市原 良之	男	社保労組執行委員 自治労府職大阪社会保険職員労働組合
団員	滝澤 伸弘	男	自治労全道庁国費評議会/事務局長 札幌東社会保険事務所
団員	仲野 公章	男	自治労全道庁国費評議会/幹事 北海道社会保険事務局留萌事務所
団員	芳賀 直行	男	自治労国費評議会/地連幹事 北海道社会保険事務局
団員	長尾 昌和	男	県職労青年部常任/青森社会保険事務所
団員	近藤 浩之	男	自治労国費評議会/地連幹事 徳島北社会保険事務所
団員	澤田 博人	男	自治労国費評議会 自治労都庁職社会保険支部/日本橋分会分会長
団員	福永 雅則	男	自治労国費評議会 自治労都庁職社会保険支部/足立分会書記長
団員	稲葉 英雄	男	自治労国費評議会 自治労都庁職社会保険支部/目黒分会分会長
記録担当	柳澤 大典	男	自治労国費評議会 自治労都庁職社会保険支部/執行委員
団員	田中 毅	男	緑の架け橋推進センター/事務局次長
事務局	鎌田 篤則	男	IFCC 国際友好文化センター/事務局長 緑の架け橋推進センター/事務局長

寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクトの概要

事業主催団体	I F C国際友好文化センター
事業助成団体	日中緑化交流基金
推進協力母体	緑の架け橋推進センター
中国側カウンターパート	中華全国青年連合
事業実施期間	2002年～2005年

【実施地域の概況】

プロジェクトの実施地である紅寺堡海子塘地区は、寧夏回族自治区のちょうど中央、東経 106° 02′ ～106° 08′、北緯 37° 25′ ～37° 28′ に位置している。

気候は中温帯早魃地域に属し、年平均気温は 8.4℃、一日の平均寒暖差 14℃、無霜期 170 日、一年の日照時間は 2882 時間、年降雨量 198mm、春冬は降雨量が地は少なく、7～9 月に降雨量が多い。年間の尾風速平均 3.0m/s、年間平均の水分蒸発量 2050mm で年間降雨量の 8.2 倍。実施月地は大羅山北麓にあり、地下水は豊富で沙礫層に含まれ、深さは 70m 程度、低い地域では 2～3m である。水質砒化度は 2 g/L ぐらい。灌漑水源は扶貧揚黄（河）灌漑水系だが、地下水も補充水源となる。

海拔 1308～1370m の山間丘陵盆地で土壤は洪水による堆積物であるポトゾル土壤と風沙土壤。水分保有性・肥料保有度は低い。土壤の有機物含有は 4.73 g/kg。フッ素・リン含有物 0.31～0.35 g/kg。植物は主に、猫頭刺、甘草、苦豆子、沙蒿、紅砂等、植物のカバー率は 20～40%。主な自然災害は風水害と洪水。毎月ほぼ 8 級以上の強風があり、沙嵐の天気は年間 24 日に上る。また、暴風雨による山崩れも多い。

1998 年に紅寺堡生態移民区扶貧揚黄（河）灌漑施設が建設されるまでは住民は少なくほとんどが天然の放牧地で耕作地は少なかった。2001 年に紅寺堡生態移民区扶貧揚黄（河）灌漑施設の建設がほぼ終了してから、移住民 1 万 7 千世帯、8 万 2 千人、農耕地は約 1 万 5 千 hm となる紅寺堡鎮が誕生した。プロジェクトの実施地の中部には滾新道路があり、この道路から北に 24km 離れたところは 109 国道（高速）で、101 省道につながる。南は塩興道路、東は 307 国道に至り、70 km に呉忠市、130 km に銀川市。

【年次計画】

3 年計画（2005 年まで）として、紅寺堡海子塘灌漑区企画地域の 2,000hm の 30%にあたる 612hm に植林する。

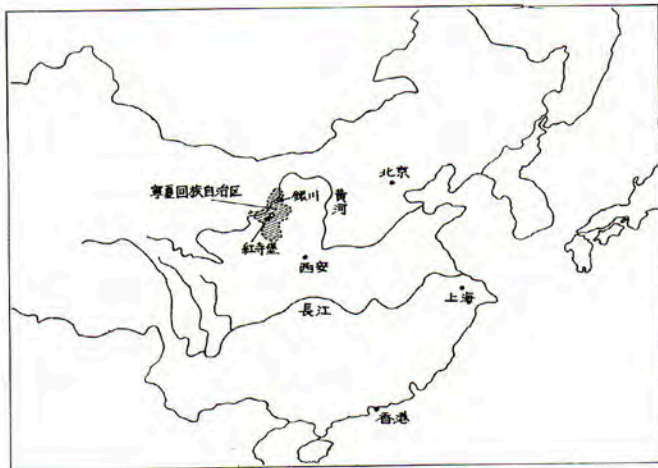
①周辺防護林 50m×24,000m、面積 120hm

②四旁林 107hm

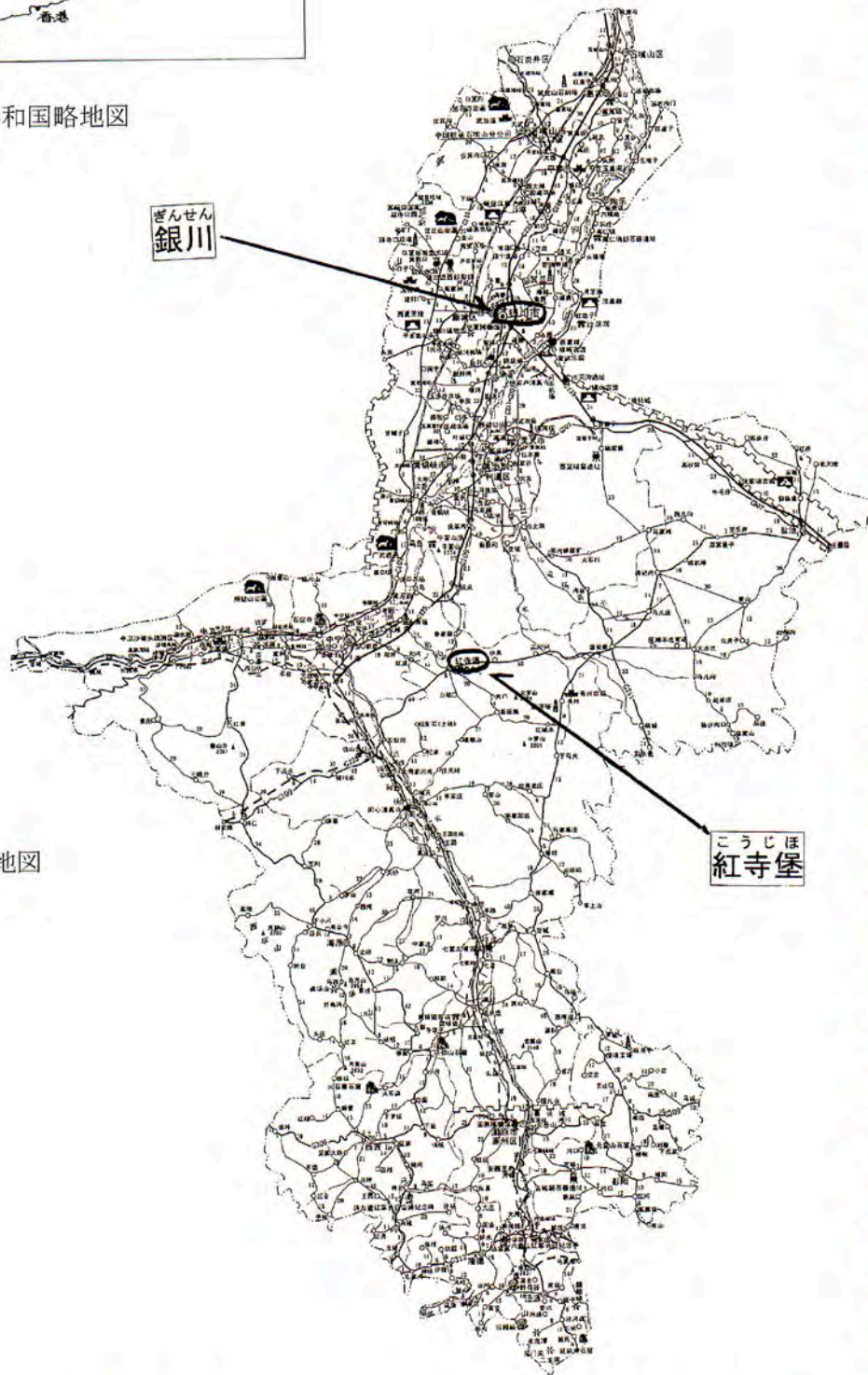
③集中林 385hm

第 1 期工事（2003 年）は 100hm を植林。場所は寧夏回族自治区・紅寺堡海子塘用水路（塩興道路側）の両側にあり、風沙防護林 30hm、集中林 70hm。風沙防護林にはアカシア・トネリコ・神樹・ナツメ・コマツナギ・ヤナギなどを混植。木と木の間隔は 3×2m、あるいは 3×2.5m、0.05hm ごとに 89 株、総株数約 93,200 株～116,500 株。アカシア・トネリコ・神樹・ナツメ・コマツナギ・ヤナギをそれぞれ約 15,600 株～19,400 株植える。集中林には早魃に強いスオスオ、木と木の間隔は 2.5×1m、0.05hm ごとに 266 株、総株数は約 107,700 株。

紅寺堡鎮の青年連合のメンバーと青年ボランティアを動員し植林する。紅寺堡鎮青年連合会は計画どおりプロジェクトを実施し管理する。その年の活着率 80%を目指す。植林の前に必ず先行して整地し、冬には水の事前散布を行い、2003 年春の植林の際、それに対応した土壤条件を確保しておく。植樹のための穴の大きさは 60×60×60cm。専従の管理者を決め、適時に水をかけ、土をかきおこし、枝落とし・補植を行う。3 年後の活着率が 75%に達するようにする。



中華人民共和国略地図



宁夏回族自治区地図

中国における沙漠化と植林緑化事業の現況

【世界中で広がりつつある沙漠】

地球上で陸地の30%以上を占める感想沙漠地帯は、気候変動と人口や家畜の増加による植生の破壊で毎年6万平方キロ（四国と九州を併せた面積に相当）のスピードで沙漠化しているといわれています。

沙漠化は農地や牧草地に影響し食糧生産の減少を引き起こします。食糧供給の悪化は、飢餓や貧困を生み、さらには難民発生や政情不安定を引き起こしかねない深刻な問題です。急激な沙漠化の進行は同時に、生態系を破壊し温暖化を進行させるなど大規模な気候変動の一因にもなっており、そうした気候変動がさらに沙漠化を加速させる悪循環を生み出しています。

【緑化事業（植林）は沙漠開発の第一歩】

沙漠化を食い止めるため、緑化事業（植林）が世界中で取り組まれています。

木々が増えれば土砂の流出を防ぎ雨水を蓄える効果と同時に、健全な生態系の回復にもつながります。そのうえで農業や牧畜を導入することで、食糧問題や貧困の解消なども期待されます。

また、植林は地球温暖化の原因とされる大気中の二酸化炭素を吸収する最も有効な手段であり、すべての生命にとって欠かせない酸素の供給源として森林の保全・拡大が求められています。

【中国でも沙漠拡大が深刻な問題に】

中国における沙漠の面積は日本の国土の約7倍にあたる267万平方キロに及び、今でも毎年、東京都に匹敵する面積が沙漠化しているといわれています。中国・国家林業局が2002年2月に発表したところでは、現在中国には267.4万平方キロの沙漠化した土地が存在し、国土総面積の27.9%を占め、土地沙漠化の状況は局部的には好転が見られるが全体としては悪化しているとしています。

こうした沙漠化により、土砂流出や飛砂（これが日本でも黄砂と呼ばれ被害をもたらしている）、風蝕等による農業生産の低下、農地の縮小などの被害が広がっています。特に黄河中流域の沙漠化は夏には集中豪雨による洪水を生み出すとともに貴重な地下水を枯渇させるなど、下流域を含め深刻な被害をもたらしています。

【着実に実を結びつつある植林緑化の取り組みと日中緑化交流基金】

中国政府は沙漠化の防止と国土緑化、地域の生活環境改善を目的に、1978年以降、黄土高原を中心とした黄河中流域での緑化事業を推進してきました。日本でも1990年に入り、中国での植林ボランティア活動を中心として、民間レベルでの緑化協力が市民団体や労働組合、地方自治体で行われてきました。

特に、寧夏回族自治区での成果はめざましいものがあり、現在までに主なものとして、①中日沙漠化地域森林復旧技術指針策定調査事業（1989年～、自治区政府と日本の海外林業コンサルタント協会の共同事業）、②中日友好林プロジェクト（1997年～、自治区と友好区県関係を結ぶ島根県の共同事業）、③中国黄河中流域防護林建設プロジェクト（1997年～、以前から中国政府が進めてきた事業に対し日本政府が無償資金協力）、④中日青少年友誼林プロジェクト（2000年～）、などの取り組みが進められてきました。そうした植林緑化活動の積み重ねにより、寧夏回族自治区の沙漠化面積は70年代初期の165万ヘクタールから、現在は126万ヘクタールまで減少し、沙漠化対策が着実に成功している地域として内外からの注目を集めています。

また、日中政府間には、民間ベースの植林緑化協力活動を支援するため、1999年に「日中民間緑化協力委員会」及び「日中緑化交流基金」が設置され、2001年度までに延べ52団体の活動に対する女性が行われています。（緑の架け橋推進センターの寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクトについても2002年度に新たな助成対象として認可されています。）

緑の架け橋推進センター

第2回植林緑化派遣団参加者募集中

日	日数	月日	都市名	摘要	宿泊
日	1	10/22 (金)	成 田 北 京	午前：成田空港→北京空港へ	北京
	2	10/23 (土)	北 京 銀 川	午前：北京市内見学 (故宮、抗日戦争記念館など) 午後：北京空港→寧夏回族自治区 銀川空港へ	銀川
程	3	10/24 (日)	銀 川	◆植林参加(補植) ◆植林現場視察	銀川
	4	10/25 (月)	西 安	終了後、銀川空港→西安空港へ	西安
	5	10/26 (火)	西 安 上 海	午前：西安郊外見学 午後：西安空港→上海空港へ	上海
	6	10/27 (水)	上 海 成 田	午前：上海空港→成田空港へ お疲れ様でした！	

寧夏回族自治区は中国の5自治区の1つで、黄河中流に位置し東南部には黄土高原が広がる。春秋戦国時代には異民族との勢力争いが激化する中で、この地から万里の長城建設が始まった。現在の州都である銀川市にはかつてチンギス・ハーンに滅ぼされた西夏王国の首都が置かれ、郊外には今も西夏王陵が点在している。人口は495万人。北京から銀川まで飛行機で約1時間30分。紅寺堡は銀川市の中心部から南に車で約2時間の距離にあり、行政区は吳忠市に属する。もとは寧夏回族自治区政府が当地に黄河からの灌漑設備を整備し、1万7千世帯8万2千人を入植させた地区であり、植林力事業を行う地域も縦横に灌漑用水が張り巡らされており、植物の育成に欠かせない水資源に恵まれている。(※寧夏植林緑化プロジェクト調査報告集より)

日 程 2004年10月22日(金)～27日(水) 6日間

参加費用 ①ご旅行費用 ￥199,000(予定)

②協力金 ￥10,000(植林支援金の一部となります)

◎募集人数：20名以上(最小催行人数15名)

◎利用予定航空会社：中国東方航空(MU)など

◎利用予定ホテル：北京(前門飯店クラス)、銀川(凱達大酒店クラス)、西安(建国飯店クラス)、上海(新世紀飯店クラス)

◎旅行費用に含まれるもの：宿泊代(2人1部屋利用)、全食事(朝5回、昼4回、夕5回 ※機内食を除く)、専用車代、移動交通費(中国国内線)、入場料、現地日本語ガイド及び通訳費用など

◎旅行費用に含まれないもの：成田空港施設使用料(¥2,040)、航空保険料(約¥500/セクター)、包括渡航手続き費用(¥6,300)、その他個人的現地費用、任意海外旅行保険、日本国内移動費用他

◎現地払い費用：中国国際線空港税(90元)、中国国内線(50元×3)

◎1人部屋追加費用：¥25,000(全行程・予定)

※添乗・通訳・添乗員はつきませんが、事務局が同行します。現地では日本語通訳がつかます。

※現地事情・天候等により、旅行日程、交通機関等が変更になる場合もありますので予めご了承ください。

2005年度『緑の架け橋推進センター』総会の開催について

日時：2004年11月18日(木) 17:00～

場所：ルポール麹町(※詳細は別途お知らせいたします)





緑の架け橋推進センター

中国植林緑化活動協力事業

寧夏紅寺堡生態緑化プロジェクト

〒162-0801 東京都新宿区山吹町333辻ビル405 TEL.03-3268-4387 FAX.03-3268-6079